

出題年度：2025 年度

<問 1>

A

【出題意図】

本問題は、言葉や表情を含むコミュニケーションの在り方について考察し、身近な事柄に対する洞察力や論理的思考力を養うことを目的としている。まず、日常生活の中から論点を見出し、多様な視点で考える力を確認する。特に、マスク文化がもたらす影響を踏まえ、言葉以外の要素が果たす役割を考察することが求められる。また、論理的に思考を整理し、自身の意見を明確に述べる力を評価する。さらに、表情や非言語的コミュニケーションの重要性に気づき、今後の社会における対話のあり方を考える契機とする。最後に、制限字数内で一貫性のある主張を展開し、適切な構成の文章を作成する能力を評価することも目的とされている。

【模範解答（要点）】

題名：「笑顔のコミュニケーションまた」

- ・マスクがコミュニケーションに与える影響は多岐にわたる。
- ・まず、理解の難しさが挙げられる。口の動きが見えないため、特に聴覚障害のある方や、言語に不安のある方にとっては、マスクの着用が理解を難しくする要因となることがある。
- ・また、非言語コミュニケーションの制約も生じる。マスクで口の動きや表情が見えにくくなることで、感情や意図を伝える非言語的な要素が制約され、コミュニケーションが難しくなることがある。
- ・心理的影響も少なくない。相手の表情が見えないことによって安心感や親近感を感じにくくなることが考えられ、対人関係において距離感が生まれる要因となる。
- ・一方で、マスクの着用が一般化する中で、目の表情やジェスチャー、声のトーン等、ことばや口元の動きや表情によらないコミュニケーション手段に対する意識が高まることが考えられる。
- ・このように、マスクはコミュニケーションにさまざまな影響を与える要因となっており、特に対面でのやり取りにおいては、より良いコミュニケーションのために様々な工夫が必要である。

B

【出題意図】

最低限の能力として、文章を正確に読み、その主題を正確に理解することを求める。その上で、問題文の主題を踏まえながら、自分自身のことを論理的に内省、分析、表現する力を考查の対象とする。

ただし、様々な価値観を認め合うことが大切であるというような一般論に終始する回答については、正面から問題と向き合えない、あるいは物事を深く考えられない、その能力不足を誤魔化しているとして、評価を下げる。わざわざ「自身のなかにある」と限定しているのは、自分自身を相対化して、深く向き合うことを求めているからである。

社会生活を送る中で、自分自身をしっかり内省する知性を持ち合わせているかどうか問われていると考えてよい。

なお、上記の事がらをクリアした上で、さらにユニークな発想、目が覚めるような指摘があれば、さらなる高評価につながる。思考の柔軟さは大きな評価ポイントである。誤字脱字、文法的な誤りは、言うまでもなく減点の対象となる。

【模範解答（要点）】

「桃色」

- ・育った家庭環境の中で「桃色」に対するネガティブなイメージが植え付けられていたことを、筆者自身が確認している。
- ・同じように、自分自身が知らず知らずのうちに身につけてしまった偏見や価値観を、具体的に挙げてみる。
- ・どのようにして、その偏見を持つようになったのか、振り返ってみる。
- ・あるいは、本文が書かれた時代の感覚と、現代の感覚との違いを考え、現代の自分自身が「桃色」にどのようなイメージを持ち、なぜそう感じる（考える）ようになったのか考察してみる。